

西側への期待と幻滅 東欧のメンタリティー、重なるウクライナの未来

有料記事 ウクライナ情勢

田島知樹 2023年6月2日 17時00分

コメントプラス

マライ・メントラインさんのコメント



欧州の首脳に出迎えられるウクライナのゼレンスキー大統領=ロイター



まさに西側の一員としてのウクライナだった。

G7広島サミット最終日。記念撮影のため西側の首脳らと並ぶゼレンスキー大統領を見て、テレビ越しにそう思った。

ウクライナは負けてはならない。そしていつかくる戦後、自由を勝ち取り、民主主義を発展させていく。民主主義を信じる一人の人間として、私はそういうウクライナの未来を願った。

だがそれは、並大抵のことではない。

私はサミットの約2カ月前にしたインタビュー

を思い出していた。

スラヴェンカ・ドラクリッチさん(73)。クロアチア出身の作家、ジャーナリストで東欧の人間の生き方やメンタリティーを見つめ続けてきた。

約30年前、冷戦が終わり、東欧の人々は強権的な共産党の支配から解放された。自由と民主主義の西側に憧れ、西側を目指した。

だが、ハンガリーやポーランドを筆頭に一部ではかつての体制に回帰しているように見える。

西欧への憧れ。ドラクリッチさんによれば、それは東欧の人々が抱いた幻想だったという。そして、その先に待っていたのが幻滅と反動だった。

「ウクライナも同様の経験をするようになるはずです」

この言葉は、G7の盛り上がりの中、私の頭の中で響き続けていた。

東欧のメンタリティーとは何か。西側への期待はなぜ失望に変わるのか。東欧の歴史をひもときながら、ウクライナの未来も考えます。

西側の魅力とは何だったのか。オンライン取材の初め、単刀直入に聞くとドラクリッチさんはこう答えた。

「なによりも物質的な豊かさが魅力だったのだと思います」

自身は1949年、旧ユーゴスラビア、現クロアチア北西部の港町リエカで生まれた。アドリア海に面した美しい町だ。

ユーゴは社会主義体制だったが、ソ連とたもとを分かち、カリスマ的な指導者チトーのもとで独自路線を取っていた。

「私たちは他の東欧諸国に比べて幸運でした。比較的自由があったんです。海外に出ることも許されており、旅行にも行けましたから。一方で夏になると西側から観光客が来ました」

それでも国は貧しかった。西側の物は全て美しく、輝いて見えた。

「おいしいチョコレートやしゃれた靴。異世界の物でした。コカ・コーラのボトルを大事に残している人もいましたよ」

自宅のあったリエカから1時間ほど車を走らせれば、イタリアに入る。ドラクリッチさんの親戚はイタリアに住んでいた。祖母とよく遊びに行ったという。

今でも強烈に覚えている光景がある。

それはイタリアのスーパーマーケットだ。

「小店しか見たことのなかった私にとって、パラダイスでした。自由に店内を歩いて欲しいものを手に取りながら探す。このスーパーで人生で初めてバナナを食べました」

西側は豊かさの象徴だった。自分たちも豊かになりたい。憧れの気持ちは東欧の人々の間で確実に積もっていった。

ただその憧れは、民主主義や人権の尊重といった政治的な価値に向けられたわけではなかった。

あくまで物質的な豊かさだった。

「西欧の標準的な生活と人権を選べと言われたら、多くの人は迷いなく標準的な生活を選んだでしょう。民主主義や自由が何を意味するのかは分かっていなかったでしょう」

1989年、冷戦が終わる。

「これで全ての問題が解決され、豊かになると多くの人が感じたはずです」

最初のうちは良かった。東欧諸国では民主主義が着実に浸透し、欧州連合(EU)、北大西洋条約機構(NATO)に加盟していった。

だが経済が上向く一方で格差が生まれた。21世紀以降、ユーロ危機、難民危機が起きる。失業率の高さから人口、特に若者の流出が問題となる。汚職は構造化している。

やがてポピュリズムの風が吹き、ハンガリーやポーランドを筆頭に東欧諸国で権威主義的な国家が生まれていった。

「ハンガリーのオルバーン・ヴィクトル首相が典型です。彼は非常に巧妙な政治家です。東欧の人間のメンタリティーをよく理解しているように思います」

オルバーン・ヴィクトル。かつては反共の闘士だったが、今は権威主義的な指導者として名をはせる。

ドラクリッチさんは、東欧のメンタリティーの特徴を2つ挙げる。

一つは強い犠牲者意識だ。オスマントルコ、ハプスブルク、ロシアなどの帝国に挟まれ、常に領土を脅かされてきた。20世紀に入ってからナチス・ドイツやソ連に踏みにじられてきた。

「自分たちは最大の被害者だ。自分たちにもっと敬意を持って欲しいという気持ちが特に強いのです」

この被害者意識は、被害者である我々と加害者という分断を生み出す。攻撃的なナショナリズムとの相性はきわめて良い。

もう一つは大衆意識だ。

「共産党体制を経て、上からの指示をただ待つことに慣れてしまった面があると思います」

一人ひとりが自分たちの頭で考え、行動する。民主主義において大切な自立した市民意識は生まれにくい。

「良識ある市民は少なく、大多数の大衆が、自分たちの代わりに何でも決めてくれる強いリーダーを望む傾向にあるのです」

これは東欧だけではなく、プーチン大統領を選び続けるロシア国民に対しても当てはまるかもしれない。

驚くのは、ドラクリッチさんの先見性だ。これらの議論の多くを、冷戦が終わって間もない90年代の段階で自著に書いている。

同じ東欧で生まれ、生きてきた彼女はなぜこのような考えを持てたのだろうか。



ドラクリッチさんは東欧のフェミニズム運動を引っ張ってきた。旧ユーゴで初のフェミニスト団体「女性と社会」の創設に携わった。著作も多く「東欧のボーボワール」と言われることがある。

政権を担う共産党の方針としては、女性の解放がうたわれていた。だが現実は違った。

「家庭内暴力など問題はたくさんありましたが、色濃く残る家父長制の影響で女性は声をあげる習慣を持っていませんでした」

また、ナショナリズムの批判者としての顔も持つ。この姿勢がもっとも端的に表れたのが、90年代の旧ユーゴの紛争だった。

旧ユーゴは多民族からなる連邦国家だった。カリスマ的な指導者チトーのもとでまとまっていたが、80年にチトーが亡くなると状況は徐々に変わっていく。セルビアの指導者ミロシェビッチを筆頭にナショナリズムをあおる指導者が現れ、冷静の終結後、各共和国が独立を目指した。その結果、民族紛争が起きる。

ドラクリッチさんはこのナショナリズムに対して戦争前から一貫して批判した。クロアチアの指導者トウジマンらにも容赦なかった。

「愛国心は良いんです。たまたま生まれた場所の友人や景色、言語を愛する気持ちですから。一方でナショナリズムは競争的で危険です。いつも敵を必要とし、対立をあおります」

「それまで自分が『なににか』なんて意識することはありませんでした。ところが政治家やメディアのプロパガンダによって近所同士がいつも簡単に敵同士となりました」

恐怖をあおり、憎しみを生み出す。そんなナショナリズムに、ドラクリッチさんはペンで抵抗した。

代償は大きかった。クロアチアの初代大統領となるトウジマン率いる政党やメディアから厳しく批判される。しまいには、92年にある雑誌から民族主義にあらがってきた仲間たちとともに「魔女」と呼ばれ、「フェミニストがクロアチアをレイプ」していると糾弾された。

まさに魔女狩りだった。

「自分が間違っているとは思いませんでしたし、恐怖も感じませんでした。99%がある方向に進む中、私は別の方向を選んだ。つまり違う意見を持っていただけのことです」

ドラクリッチさんは母国を離れ、夫の母国スウェーデンへ渡った。

「クロアチアを離れたわけではありませんよ。クロアチアの公の場から姿を消しただけです」

戦争を激化させたのは、クロアチアに軍事介入したセルビアのミロシェビッチだった。だからドラクリッチさんも「彼は帝国主義者で侵略者だった」と批判する。そのうえで、身内のクロアチア人にも違うと思ったことは、違うと言いつつ。その勇気に驚く。

私はこんな質問を投げかけた。

——あなたは当時クロアチアの独立を望んでいましたか？

「戦争を必要とする独立は望みませんでした。ただ、多くの人間は独立のために何万人もの犠牲者が出るとは思っていなかったでしょう」

——当時あなたのような考えを持てた人は少ないと思います。その行動を支えた価値観は何なのでしょう。

「自立です」

「人間はすぐにグループを作ります。グループの中にいれば安心だし楽なんです。でも私は嫌でした。家族や社会の束縛から離れ、自立したいと常に思ってきました。違うと思ったら違うと言ってきました」

知人のユーゴ研究者にドラクリッチさんの評価を聞いたことがある。「クロアチアの良心ではないか」と言っていた。ふさわしい表現だと思う。

ドラクリッチさんはその後も精力的に執筆活動を続けた。ロシアがウクライナに侵攻した昨年には、『戦争はどこでも同じ』（人文書院から邦訳予定）を発表している。

「戦争は人間の本質なのかもしれない。私たち人類はどうかしているのかもしれない」

「それでもなんとか少なくしていく努力をしなければいけない」



ウクライナはロシアではなく西側を選んだ。多くの国民がEU、NATOへの加盟を望んでいる。いつかやってくる戦後、東欧と同じ経験をすることになるのか。

「私たちはなかなか過去から学べません。ウクライナの人々も私たちと同じ失望を経験することにはなると思います。でもそれは普通のことでもあります」

「民主主義に簡単なコースはありません。その過程は緩慢で痛みの伴う、多くの間違いに満ちたものとなります。そのことを理解することが大事です」

難しいが、不可能ではない。冷静な分析からは、前向きな希望も感じた。

実はナショナリズムが吹き荒れたクロアチアでも市民社会が少しずつ成熟してきている。英語で書かれたドラクリッチさんの作品はクロアチア語に訳し直され、評価されている。民族主義の存在は今も無視できないが、「東欧のメンタリティー」の負の側面を克服しようとしている。

当然時間はかかるだろうが、ウクライナも同じだろう。「自立」した人間が少しずつ増え、「幻滅」を乗り越えた先に、西欧としてのウクライナがあるのかもしれない。

だが、これらの全ては予断を許さない戦況の行方にかかっている。ウクライナの反転攻勢はどこまで成功するのか。G7から帰国後、すぐに前線に赴いたゼレンスキー氏の報道を見ながら、私は改めてウクライナの今と未来を想(おも)った。(田島知樹)



スラヴェンカ・ドラクリッチ 1949年生まれ。クロアチアのジャーナリスト、作家。旧ユーゴ紛争を描いた『バルカン・エクスプレス』や東欧革命後の日常を見つめた『カフェ・ヨーロッパ』が有名。ボスニア紛争の集団レイプを描いた小説『エス・バルカン半島をめぐる小説』は映画化もされている。今年、『カフェ・ヨーロッパ』の続編『ポスト・ヨーロッパ』(人文書院)が邦訳された。

コメントプラス

[いま注目のコメントを見る](#) >



マライ・メントライン (よろず物書き業・翻訳家) 2023年6月2日17時0分 投稿

【視点】ここで論じられていることは、たとえばドイツ国内の「東西格差」問題の相似形でもある。至るところに同じような構図があり、特に冷戦終結以降、静かにストレスと怨念が蓄積しているように思…[続きを読む](#)



ウクライナ情勢 最新ニュース →

ロシアのウクライナ侵攻に関する最新のニュース、国際社会の動向、経済への影響などを、わかりやすくお伝えします。[\[もっと見る\]](#)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.